

小網代の森と干潟を守る会
小網代 森と干潟つうしん



モリちゃんとガタくん干潟デビュー

森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ
小網代の森と干潟を守る会

〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5

代表 高橋 伸和 E-mail: info@koajiro-higata.com

TEL.046-889-0067 (仲澤)

URL: http://www.koajiro-higata.com

年会費：一般会員 ¥1000 賛助会員 ¥5000 (入会金不要 7月～6月)

郵便振替：00260-4-21569 小網代の森と干潟を守る会

第 111 回自然観察&クリーン

“小網代干潟の鳥とラムサール条約！”



「小網代の森と干潟を守る会」のH24年活動方針の一つにラムサール条約湿地指定をめざす研修、啓発がありますが、今回はその趣旨を踏まえた定例観察会が9月29日に実施されました。

講師は、当会員で野鳥に詳しい須藤伸三、別府史朗の両氏です。

この日の参加者は、こじんまり12名でありましたが、秋の静かな小網代の干潟周辺で和やかな雰囲気の中で観察会の始まりです。

まずは、大蔵緑地で別府氏による資料を見ながらのラムサール条約とは？、日本の指定現況、指定された場合の規制・義務など全体の説明を聞いた。

何と言っても、参加者の興味の的は『ラムサール条約に指定された場合のメリット、デメリット』で、メリットとしては内外から注目[宣伝]されること、地域おこし、施設整備、環境教育の場として活用などが考えられ、特に大きなデメリットはないとのことでした。

日本の指定現況は46箇所、関東では谷津干潟、尾瀬、渡良瀬、奥日光となっている。小網代干潟が条約指定されるまでには気の遠くなるような話かもしれませんが、当守る会として「ラムサール条約指定地」にしていきましょうとアドバルンを掲げたからには、その方向で頑張っていきたいものです。

早速、須藤、別府両講師のアドバイスを受け、各自自由に双眼鏡を覗きながら観察しました。途中、みんなが河口の石橋周辺に集合し、数羽のカワセミの見事な小魚をとる妙技に目を奪われ歓声が上がっていました。

また、最後に海岸線の簡単な清掃をしました。

ところで、当日は“どんな野鳥に出会ったの？”

次の 30 種類でした。



◆ 当日見られた野鳥リスト

〔サギ類〕 ゴイサギ、ダイサギ、コサギ、アオサギ

〔猛禽類〕 サシバ、トビ、チョウゲンボウ

〔水鳥〕 カルガモ、イソシギ、ウミネコ、カワセミ、イソヒヨドリ
キセキレイ、ハクセキレイ

〔山野の鳥〕 コジュケイ、キジバト、アオゲラ、ヒヨドリ、モズ、エナガ
ウグイス、シジュウカラ、メジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ
ハシボソガラス、ハシブトガラス

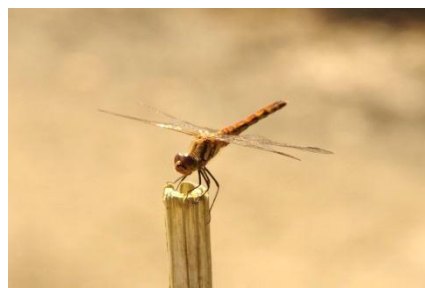
〔季節的な鳥〕 ツバメ、ヒバリ



◆ その他の生物

〔昆虫〕 エンマコオロギ、ベニシジミ、ナツアカネ、ギンヤンマ、
ウスバキトンボ、ヤマトシジミ、クロアゲハ、ツユムシ、
キイロスズメバチ、オオシオカラトンボ、ナガサキアゲハ、
キボシゴマダラ、モンキアゲハ、アオスジアゲハ、オニヤンマ、
アブラゼミ、ツクツクボオシ

〔その他〕 アカテガニ、ジョロウグモ、ナガコガネグモ



文 鈴木清市、写真 浪本晴美・松下景太

※ 観察会は NPO 法人小網代野外活動調整会議と共催で実施し、アカテガニ広場や倉庫を使わせていただきました。

9月29日の感想

じっと立ち止まって、鳥をさがしたり、動きを追ったりするのは苦手だと敬遠していたが、今回の観察会では待つ楽しさを教えて頂いた。鳥に限らず、じっとしていることで見えてくるものが意外に多かった。潮の干満もそのひとつ！潮が満ちてくると、カワセミが動きだすのを石橋付近からたっぷり見せて頂いた。ゆったりと楽しい観察会だった。ありがとうございました。

ズッキーナさん

アカテガニもチゴガニも冬に備えてモリモリと食事中。カニ取りがお下手なコサギさんの足下にはイソヒヨドリが一羽、まるでコサギをからかっているようです。初秋の干潟には、小さな生き物の命がキラキラ輝いていて、小網代って楽しいだけじゃなくて、とても大切な場所だということが、実感できました。講師の須藤先生、別府先生ありがとうございました。

Tobiyさん

森のアカテガニたちはあざやかに色づいて、すごくきれいでした。お産のシーズンが過ぎてリラックスしたようです。食欲の秋で冬を迎える準備モードです。私たちが森のキノコを試食しました。新鮮なノウタケはマシュマロのようでした。食べた私は一日たっても元気です。

伸さん

講師のラムサール条約の説明にみんな真剣でした。

H.Nさん

11月17日の感想

干潟の周りの植物をゆっくりと観察でき充実した観察会でした。特に別荘横の塩性湿地の植物はとても新鮮でした。

小倉さん

観察会の圧巻はなんといってもウシガエルのパフォーマンスですね。石造りと見たのに、まばたきした時はびっくりしました。あめふりで、なごんでいたのでしょうか。

伸さん

楽しかったですね。カエルの爆笑は忘れられない思い出になりそうです。

宮本さん

もう別荘跡ビオトープだけで一日中、いえ、一年中楽しめる！

H.Nさん

ナガボノテンツキ

アイアシ



ウシガエル

第 112 回自然観察&クリーン

“小網代の干潟周辺の植物観察”



11月17日午前10時、小雨結構と三崎口駅前を出発した。しっとりと湿った森の空気を楽しみながら尾根道を下り、アカテガニ広場に到着。ここで今日のテーマは干潟周辺で代表的な、12種の植物をみつけることと鈴木講師から発表された。10数種の植物だけをしっかりと覚える、それを10回繰り返せば、100を超える植物を覚えることができると、お話をいただいた。

早速あたりを見回せば、花期を終えたハマカンゾウ、干潟へ降りる坂にハチジョウナが一輪。さらに干潟の水際にはスゲの仲間のシオクグと、一見何もない場所から次々と目当ての植物が現れる。ひ

とつずつしっかりと学んでいくと、あっという間に正午を過ぎた。

アカテガニ広場に設営しておいたテントに戻ると、直後に激しい風雨に見舞われる。昼食をとりながら、雨が小止みになるのを待ち、干潟清掃の後午後の部へ出発する。傘をさして旧高橋別荘の裏手を回り、12種全てを発見。大きな達成感を味わいながら、観察会は終了した。

そしてこの後、別荘前の池で椿事発生！

池のウシガエルは冬眠中かしらと、覗いたスタッフが、「いた！いた！あそこの石の上！」、「全然動かない。置き物かな？」「あんなところに置き物があったかな？」「あったような、無かったような？」「あなたが置いたんでしょ？」「いやいや、置いてません」「目が動いた！生きてるよ」、「もう一匹いる！」と情報は錯綜し、石をぶつけてみようかと小石を物色する人、枯れたササでつつこうと言う人、人間どもは大騒ぎで、もう大変！

すると二匹のカエルは揃って、ドッポーン！と池の中へ・・・みんなの疑問に答えたカエルに笑い、自分たちの大騒ぎに笑い、全員大爆笑！となった。

今日の参加者は、現地合流のスタッフ1名と合わせて12名。
出会った植物は以下。



今日のテーマ植物

1. アイアシ(アシと似ているけど別属、アシ原で微妙に棲み分けている)
2. シオクグ(アシ原の奥の水際)
3. トウオオバコ(気分は巨人の国のガリバー)
4. ガマ、コガマ、ヒメガマ
5. ハマカンゾウ
6. ツリガネニンジン(咲き残りがカワイイ)
7. ヒトモトススキ(ススキとは別種だそうな)
8. ナガボノテンツキ
9. ママコノシリヌグイ(ほんとにイタイッ！から)
10. シロバナサクラタデ
11. ハチジョウナ(干潟へ降りる道に花ひとつ)
12. カモノハシ

その他に会えた植物

ハマヒルガオ(枯草の中に緑の葉が鮮やか)
アシ(ヨシ)
ハマボス(小さく縮こまって冬越し)
オオバコ(普通サイズ、ホッとする)
タチツボスマレ(?)
センニンソウ(花と実)
エノキ(天然物は味よし、香りよし、ウマシ！)
フキ、ツワブキ
ワルナスビ(どんな悪いことしたんだろ?)
ハダカホオズキ(お正月飾りみたい)
ノコンギク
ビナンカズラ(実)
etc. etc.

文 橋 美千代、写真提供 鈴木 清市・浪本 晴美

※ 観察会は NPO 法人小網代野外活動調整会議と共催で実施し、アカテガニ広場や倉庫を使わせていただきました。

随想 小網代てんてん ④

森の守り神 — エノキ（榎）

須田漢一

『徒然草』第四十五段にエノキの話がある。

「公世きんよの二位にのせうと（従二位藤原公世の兄）に、良学りょうがく僧正そうじょうと聞えしは、極めて腹あしき（おこりっぽい）人なりけり。坊の傍かたわらに大きな榎の木の有りければ、人、榎の僧正そうじょうとぞいひける。この名しかるべからず（よろしくない）とて、かの木を切られにけり。その根のありければ、きりくひ（切り株）の僧正そうじょうといひけり。いよいよ腹立ちて、きりくひを掘り捨てたりければ、その跡大きな堀ほりけにてありければ、堀池ほりけの僧正そうじょうとぞいひける。」

小網代湾側から浦の川沿いに森へ向かうと、すぐ目に付く独立樹がある。

エノキである。

広いアシ原の中に胸高直径 センチ、高さ10メートルほどの幹が、黄葉にはまだ早いが、だ円形の葉を沢山付けた横枝を四方に伸ばしている。周りを遮おさえる高木や建造物が無いから一目でそれと分かる。成長途中のエノキだが、今でも風格が十分にあり、小網代の森の守り神と云ってよい。

枝ぶりから推し測ると、地中に縦横無尽に張りめぐらされた側根は、太い根や細い紐状の根を延ばし、土や岩石を確しつりと抱いて土の流出を防いでいる。ある調査によると100年くらい経つエノキを掘り起こしたところ、直径5〜6メートル、深さ2〜5メートルほどの大きな穴が開いたという。堀池の僧正、という綽名あだなは、然も有りなん、とおかしくなる。

エノキは山地に生える落葉高木で、古くから、神霊が宿る木と考えられ神社や寺院に植えられた。タタエノキとも呼ばれ、讃たえられたり、畏おそえられたりした。エノキが化けるといふ話が各地に残っている。化けるといふことは、その木に尋常ではない異常な力があることで、神の木に繋つながるものだった。

中山道の道ばたにあった縁切榎が、その前を通った嫁入り行列の邪魔をしたという話。無実の罪で処刑された男が、死んだら榎に化けてやる、と告げたその墓に生えたエノキの話には、エノキに神がよりました古い信仰を物語るものであるという。かつて、道路の一里塚に植えられたエノキは道祖神どうそじん、いわばサエノキであり、道の守護神だった。

そうした神の木を、かの僧正は、榎の僧正、

きりくひの僧正そうじょうの綽名を気にして、地中の根まで掘り起こしてしまった。僧正といわれた人なのに神をも恐れぬ行為である。

現代もこれと似たようなことが日々おこっている。エノキはもとより、ケヤキやサクラなど、枝が通行の邪魔になるから切れ、葉が落ちるから切りつめる、と全て人の都合で幾多の樹木が成長を阻害され、消えていった。

昔、田んぼだった頃、エノキは木陰をつくってくれた。働く人びとにとつて、そこは炎天下の暑さを凌ぎ活力を取り戻す憩いの場だった。

そうした生活を見つづけてきたエノキが、堀り池にならないよう、大切にしたいものだ。幾星霜、春夏秋冬、森の守り神エノキは、ここに立っている。私たちは守られている。ほっと安心する。

2011. 9 / 14、
2012. 4 / 15 観察

干潟の雑学 (5)

小網代湾で見られる海のドングリ? — ちょっと変わったフジツボの話

フジツボ類は体の周りを石灰質の殻で覆っています。本来は体の周りに8枚の板を持っています。



シロスジフジツボ(*Fistulobalanus albicostatus* (Pilsbry, 1916))など干潟で見られるフジツボ科の仲間では1対の板が他の板とくっついてしまい6枚の板になっています。

一番前の板が嘴板、両側に1対の側板、側板の後ろの小さな1対が峰側板、一番後方の1枚が峰板です。

フジツボ類では殻板の中心に殻の蓋があります。この蓋は2対あり、前の大きな1対は楯板、

後ろの小さな1対は背板です。背板の形態は種の分類に使われ、距の湾入の大きさが重要です。

小網代湾の干潟の近くにもたくさんの種類のフジツボが暮らしています。

これまでにシロスジフジツボ *Fistulobalanus albicostatus*(Pilsbry, 1916)、サンカクフジツボ *Balanus trigonus* Darwin, 1854、ヨーロッパフジツボ *Amphibalanus improvisus*(Darwin, 1854)、イワフジツボ *Chthamalus challengerii* Hoek, 1883、などが見られています。

アマモ場近くの岩場のクロイソカイメンの中には殻長5ミリから6ミリの小形の少し変わったフジツボが暮らしています。

フジツボ亜目、ムカシフジツボ科、カイメンフジツボ亜科のケハダカイメンフジツボ *Euacasta dofleini* (Kruger, 1911)です。

フジツボの分類はチャールズ・ダーウィンの功績が大きく、小網代湾でも見られるサンカクフジツボ *Balanus trigonus* Darwin, 1854、ヨーロッパフジツボ *Amphibalanus improvisus*(Darwin, 1854)などダーウィンが研究して命名した種も多く、カイメンフジツボ類も(*Acasta cyathus* Darwin, 1854 など)たくさん研究しています。現在までカイメンフジツボ亜科は5属(*Acasta* 属、*Euacasta* 属、*Archiacasta* 属、*Neoacasta* 属、*Pectinoacasta* 属) 60種以上の記載があります。東南アジア、中国、日本にかけてはこれまでに30種以上が見つかっています。このフジツボの仲間はまだ良く研究されていないので、今後属レベルからの改訂があると思われます。



小網代ではケハダカイメンフジツボだけしか見ていませんが、日本には他にやはり本州中部太平洋岸以南に暮らすドングリカイメンフジツボ (*Pectinoacasta pectinipes* (Pilsbry, 1912)) も暮らしています。この殻はドングリ型で殻口が狭く、殻底がとがっています。ケハダカイメンフジツボと同様に尋常海綿類の中に棲んでいるので小網代でも見つかるかもしれません。関東地方の海岸ではクロイソカイメン *Halichondria* (*Halichondria*) *okadai* (Kadota, 1922)、ダイダイイソカイメン *Hymeniacidon sinapium* (de Laubenfels, 1930)、ナミイソカイメン *Halichondria* (*Halichondria*) *panacea* (Pallas, 1766) を調べたところ、クロイソカイメンにだけケハダカイメンフジツボが観察されています。小網代湾でもクロイソカイメンだけで見られます。そしてこのキブリス幼生はカイメンの組織片が存在するとその表面で付着変態することが判明しています。また上記の3種類のどのカイメン片にも着生を誘起する活性が確認されており、この着生誘起活性がカイメン由来の化学物質かそれともカイメン表面の特異的な物理的構造に由来するのかはこれからの課題のようです。



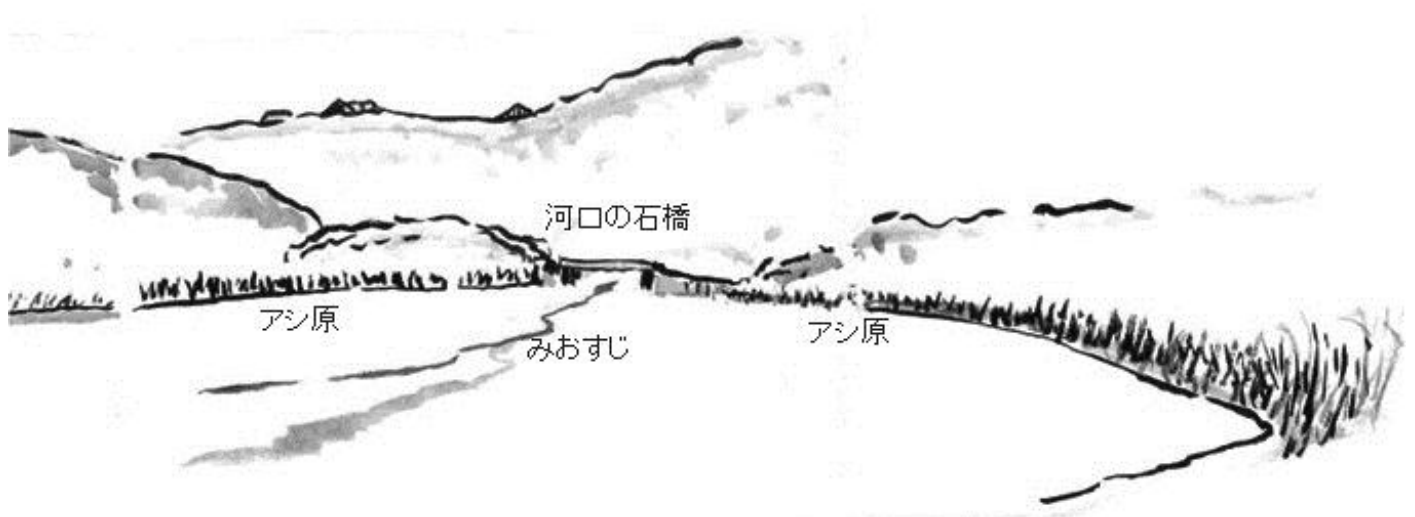
ケハダカイメンフジツボ

フジツボは英語の俗称では海のドングリ (sea acorn) と言われていると、岸先生が“ドングリと文明”という本の解説に書いています。小網代で見られるケハダカイメンフジツボを良く見るとドングリ (シイノミ) のような形をしています。イギリスの人はカイメンフジツボの形から海のドングリと言ったのでしょうか。それともイギリスの人はドングリが好きなののでしょうか？ちなみに、ギボシムシはドングリ虫 (acorn worm) と言います。

フジツボ類は卵からノープリウス幼生 → キブリス幼生 → 固着生活と一生を送ります。カイメンフジツボの仲間には周殻にあるスリットやウインドウから宿主と物質的な相互作用を行っている可能性も示唆されています。カイメンフジツボ類はどうしてそしてどのようにしてカイメンの中で暮らすようになったのでしょうか。小網代湾に海のドングリが増えて、たくさんの海の豚が小網代湾を訪れるようなことになったら…。小網代の海には楽しい生き物がまだまだたくさん暮らしています。

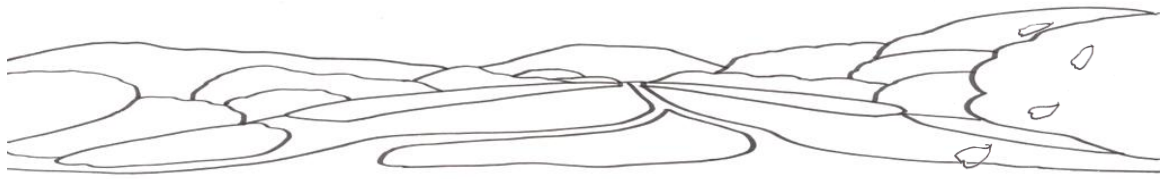
参考資料: うみうし通信, No.63(2009)、*Sessile Organisms Vol.23* (2006)、*Sessile Organisms Vol.25* (2008)
 写真でわかる磯の生き物図鑑: 今原幸光編著、トンボ出版、2011
 フジツボ類の最新学: 日本付着生物学会編、恒星社厚生閣、2006

小倉 雅實



干潟のゆりかごの小さな住人 その7

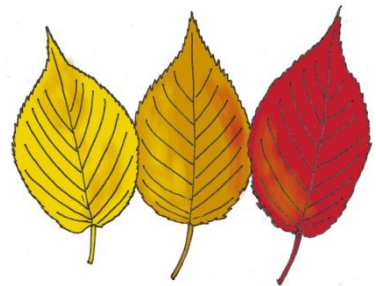
秋でもさくら冬でもさくら、干潟でもさくら



ジポーリン菜穂子

お正月を過ぎて、節分の候になると、三崎口駅周辺には、早くも桜の花が咲き始めますね。河津桜なので、花の時期が早いのです。小網代の干潟にも、桜、咲きますね。こちらは大島桜です。河津桜も、おなじみソメイヨシノも、お母さん（それともお父さん？）は、この大島桜とされています。大島桜は、海岸線が大好きな生活の領域。干潟の仲間ですよ。

アカテガニ広場からイギリス海岸を森に向かって歩くと、河口の石橋です。春になると、この橋の上から、チゴガニがいっせいに、ハサミを振ってご挨拶をしてくれるのに出会えますね。特別な場所です。マメコブシガニなどが、足元を横切っていきます。ごくたまにですが、ウナギを見つけることもあります。石橋の日差しを避けて山道に入ると、優しい木陰。影をつくる木のひとつが、大島桜です。森に少し入ると鉄板道がありますが、そこからも大島桜を眺めることができますね。



花は、たいてい、お雛祭りが過ぎてから。今は、葉っぱの紅葉がとても美しいです。桜のプロは、初冬の落ち葉の色や、その葉の落とし方から、次の年の花を予測することができるそうですね。自分のお気に入りの桜の木をひとつ決めて、花の春だけでなく、秋や冬の桜も、じっくりゆっくり楽しむのがよいのだそうです。次の花を楽しみにしながら。前の年の花や、そのときにあった事、出会った人などを思い出しながら……。桜守の佐野藤右衛門さん、いわく。

これが、本当のことを言うたら、「花見」の秘訣やね。

秋や冬のうちから、お気に入りの桜の様子を伺って、その桜に声をかけていくのだそうです。

さまざまのことおもいだす桜かな 芭蕉

こういう気持ちを春だけでなく、1年中、持ち続けるわけですね。

冬芽は褐色で皮目があります。街のソメイヨシノとほとんど同じです。桜の葉っぱは、葉のまわりがぎざぎざになっていて（のこぎりのようなので、鋸歯と呼ばれます）、葉脈はほぼ左右対称でまっすぐに伸びています・・・と説明するより、あの、桜餅を包んでいる葉っぱを思い出していただければ、よいですよ。大島桜の葉っぱがほかの桜とちがうところは、葉が大きく、葉の先がつんと長くなっているところです。かわいい。それから、大島桜の葉っぱは良い香りがします。花の時期に、河口の石橋から森に向かうとき、そこはかと良い香りがするのは、この大島桜の葉っぱです。クマリンという成分だそうで、塩漬けにするとさらに香りがひき立つそうです。桜餅に香り移って、お餅を美味しくしてくれていますね。



関東での桜餅は、山本新六という人が、隅田川沿いの長命寺（ちょうめいじ）で売り出したのが始まりだそう。あばれん坊将軍、吉宗が享保の改革を始めた享保二年、1717年のことです。ヴァイオリンの名器、ストラディヴァリウスを作ったことで有名なアントニオ・ストラディヴァリが、イタリアのクレモナという町で、活躍していた頃でもあります。桜餅が生まれた年と同じ年にできたストラディヴァリウスは、格別に名器とされていますね。ストラディヴァリが、ヴァイオリンの名器を生み出していたちょうどその頃、かたや江戸の大川（隅田川）ひとりでは、新六さんが、桜（これは山桜でしょう）から葉っぱが落ちるのを見て、はたと、桜餅を思いついていたわけです。桜餅の由来、江戸時代の百科読みもの『嬉遊笑覧』に記述があります。

大川の桜は、あばれん坊将軍の大命で、植えられたそうです。古事記に遊仙境と描かれている吉野からやってきたそうですよ。吉野へは、義経、静が恋の逃避行を企てました。歌舞伎にも「義経千本桜」という演目があります。また、太閤さんが豪勢なお花見を催しています。後醍醐天皇が南朝を開いた場所でもあります。吉野の桜は、下千本（しもせんぼん）、中千本（なかせんぼん）、上千本（かみせんぼん）、奥千本（おくせんぼん）の千本桜と言われていますね。

これはこれとはばかり花の吉野山 安原貞室

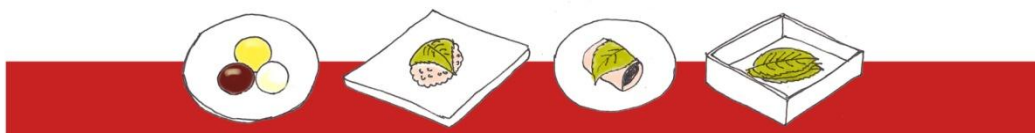
花はもちろん、桜のこと。江戸時代初期の俳人、安原貞室の作です。（『芭蕉七部集』）詠われているのは、ヤマザクラでしょうね。桜餅を包んでいたのもヤマザクラの葉でしょうね。

関東で「桜餅」と言われているもの。これは関西にいけますと、「長明寺餅」という名前になります。じゃあ、関西では何が桜餅かという、関東で「道明寺餅」と言われているものがそれにあたります。餅米のツブツブが残っていて、丸い形をしています。葉っぱがお餅とすっかり一体になっています。この葉っぱですが、一緒に食べると美味しいですよ。でも、食べなくても、よいのだそうですよ。クマリンは安全な食品添加物としては認められていないそうなので、食べ過ぎにはむしろ注意ですね。しかし、食べるときに外してしまうからといって、プラスチック製の葉っぱにしてしまってもよいものか。無害を選ぶか、毒があっても芳香がある方が選ぶか……。毒や悪は、おいしいもの、美しいものには欠かせないものかもしれません。人間のおなかや皮膚でも、善玉菌が活躍するためには、悪玉菌がいなくなってしまうはいけないそうですし。生活になくってはならないもの、でしょうか。

長命寺の桜餅は、隅田川にかかる桜橋のすぐそば。スカイツリーからてくてく歩く、ということもできますね。その桜橋のそばには、もうひとつ江戸名物のお団子がありますね。言問団子です。こちらは、江戸の終わり頃、植木師の外山佐吉によって始められたそうです。串にささっていない三色のお団子です。近くの言問橋から付けられた名前かと思うと、さにあらず。団子が有名になり、それで橋の名も言問橋となったそうですよ。『伊勢物語』の「名にしはば いざ言問はん 都鳥 我が思ふ人はありやしやと（都の鳥というのなら、問いましょう。都にいるあの人は元気にしているかどうか）」という在原業平の和歌から、団子の名前をとったのは、明治に入ってからだそうです。お元気にしていらっしゃるかしら、団子でもって訪ねてみよう、ということでしょうか。なかなか風流なネーミングですね。大正ロマンの竹久夢二など、著名人のご用達だったようです。

桜餅も、著名人のファンは多く。正岡子規などは、お店の二階でよく過ごしていたそう。

花の香を 若葉にこめて かぐはしき
桜の餅（もちひ）家づとにせよ 子規



「つと」というのは、お土産のことです。「家づと」にしたのは、言問団子や桜餅ばかりではありません。『古今集』には、素性法師の次のような和歌があります。

見てのみや 人の語らむ 桜花
手ごとに折りて 家づとにせむ 素性法師



桜の花の美しさを見ているだけで、人に伝えることができるだろうか。花見に来た私たちが、それぞれ、枝を折って、家人へのお土産にしようか。というのです。保全活動の観点からは、ちょっとドキドキしてしまう歌ですね。

いしはしる 滝なくもがな 桜花
手折（たお）りてもこむ 見ぬひとのため よみ人知らず

急流の滝が行く手を阻んでいるが、この流れがなければ、その先にある桜の花を手折って、まだ、見ていない人のために持って帰ることができるのになあ、という和歌もあります。『古今集』です。桜のひと枝を持ち帰ることは、平安貴族にとって、たいそうな風流だったわけです。また、神仙境信仰ともあいまって、桃源郷に咲く花を持ち帰ることで、少しでも、現実を超越できるとも考えたのでしょう。

江戸時代になると、桜のお土産をちょうだいね、という句もあります。磐城藩主の生まれ、松尾芭蕉の誹諧仲間でもある内藤露沾の句です。松尾芭蕉が桜で有名な吉野に向けて旅立つことになりました。花のさかりの吉野に到着するためには、江戸を冬のうちから出たのでしょうか。見送りに来て、次の句を詠みました。『笈の小文』に載せられています。

時は冬 吉野をこめん 旅のつと 露沾



今は冬だけれど、帰ってくるときには、吉野への旅のおみやげで、荷物はいっぱいになっているんでしょうねえ、ということですね。えっ、でも、江戸に戻ってくる頃には、枝ごと枯れてしまっているのでは？押し花にでもして、持って帰るのかしら……。いえいえ。旅の「つと」は、桜の枝ではなく、吉野や、桜を詠んだ句のこと。すばらしい句をたくさん詠んで帰ってきてくださいねえ、ということなのです。さすが。風流。

松尾芭蕉も気合いが入っていますよ。旅支度の笠に次の句を書きつけます。

よし野にて さくら見せふぞ 檜の木笠 芭蕉



これから、吉野に行くよ。そして、吉野に着いたら、これはこれはという桜を見せてあげるよ、というのです。芭蕉自身も書いているのですが、西行の吉野の桜への気持ちが、下敷きになっているそうです。この句です。

吉野山 こぞの枝折（しおり）の 道かへて
まだ見ぬ花の 花を尋ねむ 西行



枝折というのは、文字どおり、枝を折って、山道の道しるべとすることです。しかし、昨年の枝折のとおりに行かずに、新しい道を行ってみよう、まだ見たことのない花に会えるかもしれない、と西行は考えました。西行法師もヤブコギがお好きだったのかしら。桜は花とばかり思いこまず、視点をかえて、私たちも道を行くことにしましょう。まだまだ知らない世界が、待っていることでしょう。

参考にした本：

佐野藤右衛門『櫻よ：「花見の作法」から「木のころ」まで』（集英社 2001）

『王朝桜歌千首：牧直視写真集さくら絵巻 別冊』（求龍堂 1990）

山田孝雄(山田孝雄)『櫻史』（櫻書房 1942）



==== 小倉さんの干潟愛コーナー ====

小網代の干潟のさくら

干潟でもさくらが見られますよ。

小網代の干潟にはサクラガイの仲間のユウシオガイが少しだけ暮らしています。

またハザクラという二枚貝も少しだけ暮らしています。

これらの貝殻は干潟で見ることができます。

サクラガイの貝殻もたまに見つけることができます。

サクラガイの間には貝殻がサクラガイと同じ桃色の

モモノハナガイ（エドザクラとも）、オオモノハナ、カバザクラ、などがあります。

これらの貝殻は逗子や鎌倉の砂浜で拾うことができますよ。

30年以上前上野の不忍池によく行っていたころ、桜橋近くで桜餅を食べました。

確か3枚くらいの桜の葉で包んである桜餅でとても美味しかったように記憶しています。

春になったら干潟でお花見をしながら桜餅を食べたいと思います。



小網代オリジナル2013カレンダー 販売中(数量限定)

郵便ハガキとしても使える、写真入りのカレンダーです。

定価 500 円

送料 120 円

(複数部は送料が異なりますのでお問い合わせください)

お申込みは 郵便振替で通信欄に「2013カレンダー」とご記入の上、下記口座へ定価+送料をお振込ください。(振込料金をご負担ください。)

口座 00260-4-21569

加入者名 小網代の森と干潟を守る会



小網代詩人

眠れる干潟

中井 由実

移動性高気圧が
昨日の木枯らしを圧倒している
町に届く陽ざしは
同じように

小網代の干潟にも注いでいるだろう

春を思わせる光が湾奥に満ち
ぬくもりが土粒をつたわって
コメツキガニの小さな甲らにとどく
細い脚にもとどく

硬い暗いその眠りを
ひととき やわらげ
ふんわりとした夢のかけらになるといいのに
まだまだ遠い春
長い冬眠の途中の
この晴れた日に



グリーンベルト

中井 由実

カッシーン
どんぐりがコンクリートに当たる音
ここは昭島
いるかがシルクハットをかぶれば
後ろのつばの端にあたるどころ
多摩の小さな町

大きく伸び広がった枝から
無数のどんぐりが放たれる
土に落ちたのであれば
小さな根を出してもぐっていくのだが
そこは有機溶媒庫の前
木の実は転がっていくだけ

目指す先は
いるかの背中のグリーンベルト
三浦の海に向けて点在する緑だまり
あの一つになりたいのね
そんな想いがわかるから
足元近くの一つを拾い上げ
左手にぎゅっと握りしめた

◆ 小網代の鳥は裏切らない

久しぶりに 鳥の観察会だというので、出かけてみた。以前は冬に企画されていた観察会が渡り鳥への期待でこの時期なのかと思う。

アカテガニ広場でラムサール条約のレクチャーを受けたが、小網代の森と干潟も十分に資格はあると思った。また、意外にも日本では小さな湿地が条約湿地で、数は多い。後は、環境省の賢明なご決断だと思います。ちなみに私が行ったことのある湿地は伊豆沼、これは野鳥の会のツアーで参加。谷津干潟、これも野鳥の会の案内。北海道のウトナイ湖、ここも野鳥の会の運営のゲストハウスがあった。

アカテガニ広場で一番のご対面は、向かいの白髭神社の森の海に反り出た枯れ木に止まっていたゴイサギ、教えて貰って、プロミナーを向けようとしたら飛んで行ってしまった。久しぶりだったのに。太った体だけが目に残る。

河口の石橋へ場所を移したら正解、正解。期待通り、カワセミが上流側の右の岸辺の藪に、次の固体が左の岸辺の藪に。おや、こちらに茶色いお腹を見せて石の上に止まっている。カメラを向けていた方に写真はとれたか尋ねたら撮れなかったとのこと。残念。このカワセミの写真を元に今、凝っているふたつき陶器にカワセミの絵を描いている。一つは鈴木茂也さんの写真。もう一つは須藤伸三さんの写真。お腹の茶色を見せて、魚を見張っているカワセミの写真を見せてもらって今、作っているふたつき容器に描き入れたいと思ったのに・・・。

最後に鳥合わせをしたら30種以上の鳥の姿・声が確認できたとのこと。その内、わたしがわかったのは半分もない。これからも こんな観察会に参加して、少しでも、鳥と仲良くできたらよいと思う。案内の須藤さん、別府さん、ありがとうございました。

宮本 美織

◆ 赤い花なら曼珠沙華

小網代の森の中で、ヒガンバナ「彼岸花、曼珠沙華」が咲く頃になりました。森の中流域でも咲いていた記憶があります。昔の人たちは、田の畔へヒガンバナを植えていきました。以前、森の中に水田があった何よりの証拠です。

不吉、縁起が悪い等忌まわしい花として嫌われてきましたが、最近では人里近くの田園風景を彩る季節の花としてすっかり有名になりました。

埼玉県飯能市郊外の巾着田は、その数100万本という全国最大級の群生地として有名で大勢の花見客が押し寄せています。川の流れが緩く蛇行して、和服の女性が手にするキンチャクに似た地形からその名があります。

中国原産の帰化植物で、花の北限は秋田・岩手で南限は鹿児島といわれています。県内でも伊勢原市日向や厚木市七沢では、人里植物と呼ばれ農道や畦道へ盛んにヒガンバナを植え付けて次々と名所になっています。

花が散った冬でも青々とした葉を茂らし、4月頃には全て枯れてしまいます。種子はできず、地下の鱗茎が分かれて繁殖します。



祖父川 清治

カニグッズ 3



今回は来年のカニパトに向かって作ったかのにのペンダントトップです。縦横2cmくらいの台の中にアカテガニをイメージした小さいかにかが入っています。今度は深い海をイメージした台に赤いかにかを載せたペンダントトップを作りたいと思っています。皆様のカニ放仔観察の感動を形にできたら幸いです。どんなものになるやら、作る本人も指まかせです。お楽しみに。



カニグッズ作家 宮本美織

横須賀市 自然環境講演会

『樹林地の適切な維持管理』

～近年の集中豪雨を生き物の環境から見ると～

講師：慶應義塾大学教授 岸 由二氏

日時：2012年12月8日(土)
14時～16時(開場13時30分)

場所：横須賀市自然・人文博物館(横須賀市深田台95)

募集人数・定員：先着100名(事前申し込み制)

内容：近年の集中豪雨などの異常気象が生き物に与える影響や生き物環境・防災的な面から考える樹林地の適切な管理などについてご講演いただきます。

費用：無料

申込方法：電話またはファックス、メールで
住所・氏名・年齢・電話番号・参加人数をお知らせください。
(定員になり次第締め切ります。)

お問い合わせ

横須賀市環境政策部環境企画課 担当：自然環境担当
横須賀市小川町11番地 本館2号館6階 [郵便物：〒238-8550 環境企画課]
電話番号：046-822-8528
ファックス番号：046-821-1523
メール：ne-ep@city.yokosuka.kanagawa.jp

小網代の森と干潟を守る会の活動

- 8/26 スタッフ会議(三浦市南下浦市民センター)
- 8/26 小網代の森と干潟を守る会 第2回総会
- 9/8 小網代 森と干潟つうしん No.125 印刷・発行(横須賀市民活動サポートセンター)
- 9/29 第111回自然観察&クリーン「ラムサール条約と干潟の鳥」開催
- 9/29 スタッフ会議(三浦市総合福祉センター)
- 10/6 NPO 法人小網代野外活動調整会議 ココボラ支援
- 10/21 NPO 法人小網代野外活動調整会議 トラスト観察会支援
- 11/17 第112回自然観察&クリーン「小網代の干潟周辺の植物観察」開催
- 11/17 スタッフ会議(三浦市総合福祉センター)

今後の自然観察&クリーン日程

- 2/23 海藻の観察
- 4/29 植物の観察
- 6/15 干潟のカニと貝
- 8月中 アカテガニの放仔
- 10/12 鳥の観察
- 12/7 植物の観察
- 2月中 海藻の観察



ご寄付ありがとうございます

会の活動費 浪本晴美様 須藤伸三様 佐藤春代・千夏・うらら様 関口広隆様

森の応援金 別府史朗様 藤澤浩子様 橋美千代様 山本述子様

以上の方からご寄付をいただきました、ありがとうございました

のたろんフェア 2013 に小網代の森と干潟を守る会も参加します

日時：2013年2月9日(土)・10日(日) 10:00~16:00

場所：横須賀市民活動サポートセンター(汐入駅すぐ)

横須賀市内の市民活動を行っているグループの展示紹介、ステージ紹介、食べ物販売など、いろいろあります。当会では小網代関係の書籍、春の花の苗、陶製の花の香立て、その他いろいろ持って行く予定です。お時間がとれましたら、是非お立ち寄りください。

第 113 回自然観察 & グリーンのお知らせ

主催: 小網代の森と干潟を守る会 共催: NPO 法人小網代野外活動調整会議

◆小網代の早春の海藻と磯の生きもの

毎年早春の2月初旬から4月中旬にかけて三浦半島ではワカメ、ヒジキ漁が行われます。海藻などの藻類は二酸化炭素を吸収しながら酸素を出して、沿岸の生態系で重要な役割も果たしています。また、磯に棲む多くの小さな生き物の命を支えています。早春の小網代ではさまざまな海藻とそこに棲む小さな生き物に出会えます。

日 時: 2013年2月23日(土)10時 三崎口駅前集合
(小雨決行)

講 師: 小倉 雅實氏

参加費: 無料

申 込: 当日現地で受け付けします

持ち物: 長靴、お弁当、飲み物、雨具、小さなお子さまは着
替えもあると安心です

(図鑑や虫眼鏡などの観察用具もあると楽しい)

お問合せ: 046-889-0067 (仲澤)



NPO 法人小網代野外活動調整会議からのお知らせとお願い

小網代の森と干潟を守る会は NPO 法人小網代野外活動調整会議の活動を支援しています。

トラスト緑地保全支援会員 & 小網代応援団募集

◆トラスト緑地保全支援会員になるには

トラスト財団のパンフレットにある申込書に記入して郵送します。またはトラスト財団のホームページ (<http://ktm.or.jp>) から、申し込むことができます。支援したい緑地にはぜひ「小網代の森」をお選びください。通常のトラスト会費(大人 2000 円、中高生 1000 円、小学生 500 円、家族会員 3000 円)の他に 3000 円の支援会員会費が必要です。小網代の森をよろしく願います。

◆小網代応援団に入るには

NPO 法人小網代野外活動調整会議 (電話: 045-540-8320 E-mail: koajiro@koajiro.org) までお問い合わせください。

「小網代応援団」に登録していただいた方には、年に数回の特別観察会をご案内いたします。森と干潟の様子をしっかりと見守り、楽しみながら、大好きな森を育てていきましょう。

小網代 森と干潟つうしん NO.126 2012年12月1日発行
森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ
小網代の森と干潟を守る会
〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5
代表 高橋 伸和 E-mail: info@koajiro-higata.com
電話 046-889-0067 (副代表 仲澤)
URL: <http://www.koajiro-higata.com>
年会費: 一般会員¥1000 賛助会員¥5000 (7月~6月 入会金不要)
郵便振替 口座 00260-4-21569 加入者名 小網代の森と干潟を守る会
* 既に退会のご連絡をいただいた方にも年度末(6月末)までお届けしております